

第26回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (17th EAJIS International Conference)

於:ベルギーゲント大学 2023年8月18-20日

スペインの日本語学習者の自発的発話を阻害する要因

- 「恥ずかしさ」を軽減するために重要な日本人との交流

久保賢子 (スペインサラマンカ大学) ・ 中西久実子 (京都外国語大学)

0. 本発表の流れ

1. 目的
2. 背景
3. 仮説・先行研究
4. 調査の概要
5. 調査の結果
 - ① 口頭運用能力テストの結果
 - ② インタビューの結果
6. まとめ
7. 授業担当の教員（日本語母語話者）の観点からみた学習者の「恥ずかしさ」の軽減
8. 結論

1. 本研究の目的

- ① 自発的発話を阻害する要因は何かを明らかにする
- ② 自発的発話を増やすために何が必要か明らかにする

2. 背景

- 問題意識
 1. 大学で日本語専攻だが、発話が苦手
 2. 文法は学習し、理解できるが、使えない。
- 読解特化のカリキュラムを修正するも、ステップアップの困難さ残る
(産出技能, 特に「話す」技能)

例：日本語専攻1年生：「みんなの日本語初級1」, 「まるごとA1」, 「ベーシック漢字1」
日本語専攻2年生：「みんなの日本語初級2」
日本語専攻3年生：読解教材 → 「まるごとB1」など

3. 仮説・先行研究

仮説 1)

1. カリキュラム上の制約か
2. 発話機会の少なさ, 自発的発話の不十分さ

→ 日本人との「接触場面」を増やし, 発話機会を増やすことで自発的発話を促すことができるのではないか。

3. 仮説・先行研究

恥ずかしさ

- 相手の前で話すことを躊躇すること

仮説 2)

- 1 → 学習者の自発的発話が増えないのは色々あるが、
恥ずかしさが最も重要な要因なのではないか。
- 2 → 親しい仲で話せることで恥ずかしさは軽減し、
会話能力の向上につながるのではないか。

3. 仮説・先行研究

先行研究

1. 文法的な正確性 ≠ コミュニケーション能力 (Hymes, 1972)
2. 第二言語習得における学習者の心の在り方, 性格的な特徴などが深く関係 (MacIntyre, 2002)
3. 口頭表現能力と情動スキーマとの関連性なし (土居, 2012)
4. TAのような身近な存在は, 学習者に話す自信を持たせる (久保・中西, 2022)

3. 仮説・先行研究

不安

1. 心理学的：主に悪いことを予想している精神状態（Neylan, 1962）
2. 第二言語習得：母語以外の言語を学習，使用することによって生じる心配や恐れ的感情（Gregersen & MacIntyre, 2012）

不安を軽減するには

1. 教師のサポート（Horwitz, 2017）
2. 教師による教育介入（藤井聡美, 2020）
3. 学習者の不安を軽減（山下悠貴乃, 2022）

4. 調査の概要

対象：スペインの大学の初中級総合日本語の受講者 40名

- ・『まるごと中級1』を使用（週3回／4時間半）

調査方法：

- ・日本人との「接触場面」を増やす（仮説1）
 1. 日本語の授業中に日本人TAを導入（TAが入った授業23回／全35回）
 2. 日本人留学生との言語交流会(週一回一時間)の設定

効果を下記で確認

- a. 学期初め・終わりの2回の口頭運用能力テスト（40名）
- b. 授業と言語交流会について半構造化インタビュー（18名）
- c. 日本人のTAおよび科目担当教員へのインタビュー（1名）

口頭パフォーマンス評価項目 (B1)

身近な話題の説明、複文・手順説明、理由文・意見述べ

聞き取り	質疑応答
会話量	会話量
表現	3) 文法の正確さ・文構造の複雑さ(複段落)
	4) 表現・コロケーションの豊かさ
話し方	5) なめらかさ(発音, 間合い・ポーズ・イントネーション)
	6) 終助詞「ね」「よ」などの使用
	7) 納得「えー」「へー」問い返し「えっ?」の使用
	8) スピード, 声の大きさ
会話内容	ウォーミングアップ(タスク1)
	タスク2 (旅行)
	タスク3 (料理の作り方)
	タスク4 (まんがについての意見)

口頭パフォーマンス評価のために

口頭表現能力評価、JOPT (Japanese Oral Proficiency Test) 対応表

JOPT 5	ほとんど自力でやっていけるため、他への依存は必要ない	2,0 点
JOPT 4	だいたい自力でやっていけるが、ある程度の依存は必要	1,5 点
JOPT 3	何とか自力でやっていけるが、かなりの依存を必要とする	1,0 点
JOPT 2	かなりの依存が可能でも、自立してやっていくのは難しい	0,5 点
JOPT 1	どんなに依存が可能でも、ほとんど自力ではやっていけない	0,0 点

5. 調査の結果

① 口頭運用能力テストの結果

全体（40名）	口頭表現能力 平均点
学期初め	5,31 /20点
学期終わり(3か月後)	11,45 /20点

インタビューで「恥ずかしさ」を 報告していた学習者（8名）	口頭表現能力 平均点
学期初め	5,51 /20点
学期終わり(3か月後)	10,47 /20点

5. ② インタビュー調査の結果 自発的会話が増えた理由

- a. 日本人との交流 44
- b. TAの存在 37
- c. 授業 20
- d. マンガ・アニメ 11
- e. 誰かと話す 10

5. ② インタビューの結果 自発的発話ができないことについての学習者の意識（発話阻害の原因）

- a. 恥ずかしさ 28
- b. 苦手意識 22
- c. 緊張 14
- d. 不安 13
- e. 自信なさ 8

→ 上記のマイナスの意識があることが分かった

マイナスの意識が生じる原因

1. 不慣れ **11**
2. できない・わからない **37**
 - a. つっかかる
 - b. 言葉が出てこない
 - c. リアルな状況に対処できない
 - d. 頭が真っ白になる
 - e. 何が何だか分からない
 - f. とっさに反応できない

6. まとめ

1. 証言 a.) 正しくない日本語で話すのが「恥ずかしい」,
b.) 間違うのが「恥ずかしい」,
c.) 日本人と話すのが「恥ずかしい」と感じる
2. TA学生が入ることで、授業中の学習者の発話機会が増える。
確信をもって発言できる。日本人と話すことに慣れる。
3. 日本人との交流が増え、躊躇することが消えていく。
→ 恥ずかしさが軽減され、どんどん話せる
4. どんどん話すことで自信がつく
→ 自発的な発話につながる

7. 授業担当の教員（日本語母語話者）の観点からみた学習者の「恥ずかしさ」の軽減

- 授業担当の教員へのインタビューデータから、

学習者の「恥ずかしさ」を軽減し、

自発的発話を誘発する要因を示し、本発表の主張を補強する。

教員の視点からみても

「多文化共生社会で学習者の「自発的発話（加藤伸彦, 2021）」を増やすためには

学習者と年齢が違い日本語母語話者のTA学生の存在が必要

授業担当教員へのインタビューの概要

実施 2022年12月15日木曜日 10:00-11:00

- 半構造化インタビュー
- 協力者：20代男性 日本語母語話者スペイン語教授法で修士号取得
- 日本語教員歴 4か月（2022年9月から教え始めた）

TA学生が及ぼす日本語クラスへの変化

- TAと教員で連帯感ができた。教師自身の気分も鼓舞された。
- 授業内の活動のファシリテーターとなってくれた。たとえば、質問に誰も答えない場合、TA学生に切り出しの質問を投げかけて、学習者の質問を誘発できた。
→クラスで最初に発言する「恥ずかしさ」の軽減
- 授業にTA学生がいたほうが学習者の発言の頻度は高くなる。
- TA学生がいて良いことが100あるとしたら、困ることは2くらいしかない。
グループディスカッションのとき、TA学生がいると話が脱線することがあるが、脱線しても進度は速くなるので問題はない。

TA学生が及ぼす学習者への変化

- TA学生が授業に入ると、学習者は積極的に手をあげるようになったし、積極的に意見が言える回数が増えた。
TA学生がいないと、消極的になって手をあげなくなる。
- TA学生が授業に入ると、クラスの雰囲気良くなる。
- 学生がオンになり、目がキラキラする。

なぜキラキラするのか： 自発的発話が誘発される仕組み

たとえば、オリンピック種目の話題のとき、「種目」がわからない学習者がいた。そのとき、TA学生が説明をしたら、学習者は理解した。そして、「先生は何かスポーツやってたんですか」と聞いて話が逸れていったことがある。

TAは「わからない→先生には質問しにくい→自発的発話に消極的」
という負のスパイラルを断ち切った。

TA学生とのやりとりで「できる」を体験でき、
話すことへの「恥ずかしさ」が軽減
→自信がついてさらなる自発的発話を誘発→キラキラする

年齢差の問題（TA学生と教員，TA学生と学習者）

- 学習者の意見「先生は年齢が近いから，話しやすい」と言われた。
 - 教員の意見「TA学生と私との相性が良かったと思う。最初から壁を感じなかった。年齢が近いからだと思う。」
- ↓
- 年齢が近いTA学生が教室にすることで，学習者の「恥ずかしさ」が軽減されるのではないか。

「多文化共生社会で「自発的発話（加藤伸彦, 2021）」を増やすためにTA学生が必要

授業内は閉じた空間であり，多様な人種，さまざまな年齢の人から構成される多文化共生社会とは隔たりがある。

しかし，日本語母語話者のTAが授業にいれば，年齢が近い相手と外国語を使う接触場面が仮にでも設定できる。

この模擬空間で話すことにより自信がつき，「恥ずかしさ」が軽減される。

自発的発話が少しできるようになると，多文化共生社会でのリアルなコミュニケーションに至るまでの第一歩となるのではないか。

結論

1. 発話を阻害する要因が恥ずかしさにもあるのではないか（仮説2）

→ 学生へのインタビューより、「恥ずかしさ」に関する証言が得られた。

2. 恥ずかしさを軽減させるため、日本人との「接触場面」を増やし、
自発的発話を促すことができるのではないか。（仮説1）

- TAや日本人留学生との接触場面を増やす
- 親しみある関係のもとに、「恥ずかしさ」が軽減でき、自信がつけられた

→ 親しい仲で話せることで恥ずかしさは軽減し、
コミュニケーション能力の向上につながった。

参考文献

- 末松和子 (2014) 「キャンパス共生社会を創る－留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて－」 『留学交流』 vol.42, pp.11-21, 独立行政法人日本学生支援機構
- 土居繭子 (2012) 「日本語の会話能力向上に影響する要因の考察：情動スキーマや動機との関係から」 『静岡産業大学情報学部研究紀要』 14, pp.169-180, 静岡産業大学情報学部.
- 藤井聡美 (2020) 英語学習者が抱える授業内言語不安の解消に向けて－混合研究を通じた考察－. JACET北海道支部紀要/ 大学英語教育学会北海道支部 編 16, pp. 57-81, 大学英語教育学会北海道支部
- 山下悠貴乃 (2022) 「国際共修科目のプログラム開発：日本人学生と留学生が伝え合うための取り組み」 『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』 37, pp.113-123.

参考文献

- Gregersen, T. & MacIntyre, D.P. (2012), “Affect: The Role of Language Anxiety and Other Emotions in Language Learning”, In (Eds) S. Mercer, S.Ryan & M.Williams. *Psychology for language Learning –Insights from Research, Theory and Practice*, pp.103-118.
- Hymes, D. (1972). Models of the interaction of language and social life. In J. Gumperz, & D. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication* (pp. 35-71). New York: Holt, Rhinehart & Winston.
- Horwitz, E. K. (2017). On the misreading of Horwitz, Horwitz and Cope (1986) and the need to balance anxiety research and the experiences of anxious language learners. In C. Gkonou, M. Daubney, & J-M. Dewaele (Eds.), *New insights into language anxiety: Theory, research and educational implications*. pp. 31-47. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- MacIntyre, P.D. (2002). “Motivation, anxiety and emotion in second language acquisition”. In (Ed.) Robinson. *Individual Differences and Instructed Language Learning*.
- Neylan, P, M. (1962) “Anxiety”, *The American Journal of Nursing*, 62, 5, pp.110-111.